

2つの災害とじゅうねん石けんが結んだ絆

熊本と只見の交流深めた「石けんづくり教室」

2月14日、只見農産加工企業組合「げんき村」のじゅうねん(えごま)石けん「NICOBABY(ニコベビー)」を開発・製造する熊本県のLadybug(レディバグ)オーナー・豊田希さんの「石けんづくり教室」が只見振興センターで開催され、町内外から22名が参加し、くまもと県民テレビや福島中央テレビも取材に訪れました。

げんき村では、販売できずに捨てていたえごま油を石けんに活用できないか模索していたところ「レディバグ」のウェブサイトを見つけ、げんき村従業員の齋藤幹子さんが、新潟・福島集中豪雨で熊本から復旧支援をいただいたことや只見の雪まつりで熊本復興応援をテーマに「熊本城」の大雪像をつくったことなどをつづり、互いに復興につながる石けんをつくりたいという想いをメールで伝えました。レディバグは熊本県阿蘇郡高森町で石けんの製造・販売を手掛けており、体に優しい石けんを作ることで熊本県内外でも高い評価を得ています。今回、齋藤さんからのメールに心を揺さぶられた

豊田さんは、げんき村とコラボしたじゅうねん石けんをつくるようになりました。このじゅうねん石けんは、只見の春をイメージしたピンク色をベースにえごまの色で雪食地形をイメージした模様をつけています。石けんは、赤ちゃんにも使える意味と災害を乗り越えて笑顔になれる意味を込めて「ニコベビー」と名付けられ、今年2月にデビューし、雪まつり会場で販売されました。

教室では、「ニコベビー」が誕生した絆などが紹介され、熊本と只見の縁を感じながらじゅうねん石けんづくりが行われました。参加者からは「この縁に加えてもらいうれしかった」などの声が聞かれ、齋藤さんは「熊本と只見がつながったと感じた」と話し、豊田さんも「今後も関係を築いていきたい」と述べられ、熊本と只見で発生した災害とじゅうねん石けんを通して、新たな交流が生まれました。



▲開催した豊田さん(2列左から4人目)と齋藤さん(同5人目)、教室に参加した皆さんと取材されたFCTの直川貴博アナウンサー(右)



▲FCTゴジてれchuの番組でも紹介された「石けんづくり教室」



▲現在げんき村で購入することができるじゅうねん石けん「ニコベビー」



あやの
吉津 彩乃さん
(長浜)



いお
横山 依央くん
(小林)



こたろう
角田 虎太郎くん
(大倉)



そうすけ
馬場 蒼介くん
(福井)

虫歯の
ない子



(1月29日)
(3歳児検診)

只見町教育委員会教育委員の辞令交付式 十島の菅家貞子さんが就任

2月1日、只見町教育委員会教育委員の辞令交付式が役場で行われ、十島の菅家貞子さんが就任されました。教育委員は、町の教育振興のため教育政策の提案や町民の教育への意見、ニーズを教育行政へ反映させる役割を担っています。辞令交付式では、菅家町長から菅家さんへ辞令書が手渡され、今後の活動をお願いしました。菅家さんの任期は、2月1日から4年間となります。



▲辞令書を手にする菅家貞子さん(右から2人目)と菅家町長、橋本副町長、渡部教育長

県警本部「交通安全コンクール」で表彰 小林明老会が「交通企画課長賞」



▲菅家町長(中央)に報告した角田会長(下段右)と同席した県や県警関係者の皆さん

2月18日、福島県警本部の「わが町の交通安全マップコンクール」で交通企画課長賞に選ばれた小林明老会の角田睦会長が役場を訪れ、菅家町長に受賞報告しました。このコンクールは、交通安全意識を高め、危険箇所の安全対策に活用することを目的としているもので、明和小学校児童の見守り活動に取り組む小林明老会が通学路を中心に危険箇所などをまとめたマップを作成しました。作成には小林明老会をはじめ、防犯協会や交通安全母の会、南会津警察署、県山口土木事務所などの約20名が協力し、大倉・小林集落内の通学路を調査しました。調査結果を角田会長が地図に落とし込みマップを作成。危険箇所には対策案を掲載し、国道を管理する山口土木事務所が一部対応しました。報告では、角田会長が菅家町長にマップを紹介し、菅家町長がその栄誉を称えました。

アウトドアプランナーとして町の魅力を発信 人材育成第9期生の「閉講式」を開催

2月27日、人材育成第9期生の閉講式が只見振興センターで開かれ、関係者が出席しました。9期生11名は「アウトドアプランナーの育成」をテーマに、町の地域資源やイベント企画の基礎知識など学び、最終的にはアウトドアプランの企画立案を行いました。閉講式では、菅家町長から受講生に修了証が手渡され、受講生からは「アウトドアプランナーとして町の魅力を発信していきたい」などの目標が伝えられました。また、最終講座では成果報告が行われ、9期生の講師を務められた新潟県三条市の(株)スノーピーク西野将氏の前で、雪や田子倉湖など町の自然を活用した様々なプランを自身が制作したチラシとともに紹介し、アウトドアプランナーとしての第一歩を踏み出しました。



▲2年間アウトドアプランナーの知識と技術を学んだ9期生の皆さんと今後の活躍を期待する菅家町長、渡部教育長

落語の魅力と笑いを伝える

立川こしら師匠「真冬の落語会」開催

2月23日、立川流真打・立川こしら師匠の「真冬の落語会スペシャル」がこみと屋（館ノ川）で開かれ、約30名が来場しました。これは、旅館みな川の星恭子さんなど地域住民でつくる「ミナカワPLUSONE」が主催したもので、師匠の落語は今年で3回目となります。今回は、来場者からの演目リクエストに応える形で行われ、「替わり目」「火焰太鼓^{かえんだいこ}」から「芝浜」といった人情噺まで全7演目を披露し、会場は大きな笑いに包まれました。只見開催3年目を迎えた師匠は「只見は若者主導でチャレンジしており、活気を感じます」と印象を話され、町民に落語の魅力と笑いを届けました。



▲落語の魅力と笑いを届けた立川こしら師匠



▲袴を着て大きな声で豆をまくさくら組の皆さんと横山保育所長

心の中の悪い鬼を追い払う

各保育所で「豆まき」を開催

2月1日、節分の行事「豆まき」が町内の各保育所で行われました。朝日保育所の豆まきでは、ホールで子どもたちが遊んでいると窓から突然鬼が登場。子どもたちは逃げ回りながらも一生懸命に豆をぶつけて鬼を退治しました。続いて、さくら組の男の子4名は「寝坊鬼」や「泣き虫鬼」など心の中の鬼を退治したいと話し、袴を身にまとい保育所内の各部屋を「鬼は外～！福は内～！」と大きな声で豆をまきました。また、只見町昔ばなしの会の渡部悦子さんと菅家ツヤさんが昔ばなしを披露し、節分や豆まきの由来などを紹介し、みんなで節分を楽しみました。

只見町ブナセンター

外来生物について学ぶブナセンター講座を開催

2月17日、只見町野生動植物保護監視員の講習会を兼ねたブナセンター講座「外来生物をどう防ぐかー外来種問題を知るところから始めよう！」が朝日振興センターで開かれました。国立環境研究所の池上真木彦氏を講師に迎えた講座では、外来生物による地域本来の生態系の変化や人間の安全・健康を損なう危険性などの影響と問題、最前線の防除方法について国内外の具体例をあげながら説明されました。参加者は動植物や自然環境を大切にすること、問題の原因となる外来生物を持ち込まないことを第一に、外来生物の侵入監視のために自然環境に目を配ることが大切であることなどを学びました。



▲参加者の質問に答える池上氏

各地区の民芸品保存会の方々が伝統工芸の魅力を伝える 町内3小学校で「つる細工教室」開催

只見町の伝統工芸を学ぶ「つる細工教室」が町内3小学校で開かれました。これは、伝統工芸を後世に伝えるために学ぶ機会を授業に取り入れて実施しているもので、2月19日に明和小、2月20日に只見小、2月22日朝日小の日程で行われました。

各地区の民芸品保存会の方々が指導したつる細工教室では、児童たちが藤ツルを使って上手にざるやかごなどを製作しました。つる細工を体験した児童からは「難しかったけどとても楽しかった」との声が聞かれました。



▲民芸品保存会の方々からつる細工を学ぶ児童の皆さん



▲中華料理の魅力を伝えた講師の酒井さん(中央)と本場の中華料理を学んだ参加者の皆さん

本場の中華料理を学ぶ 「中華料理講座」を開催

2月23日、只見振興センターで「中華料理講座」が開かれ、地域住民11名が参加しました。講師に黒沢の酒井今日子さんを迎え、「焼き中華まん」「大根のだんご」「野菜スープ」を作りました。

「焼き中華まん」は生地から手作りし、あんは肉と冬野菜を混ぜ合わせ生地で包み、こんがり焼きあげました。また、「大根のだんご」は中国の正月「春節」でも食べられる正月料理の一つで、大根のみじん切りに豆腐やエビなどを一緒に混ぜてだんごを作りました。完成後は全員で試食し、中華料理の味を堪能していました。

只見高校野球部OBの渡部仁さん 野球部に野球用具を寄贈！

2月26日、只見高校野球部OBの渡部仁さん(楯戸)が同校を訪れ、野球部に金属バット2本とボール2ダースを寄贈しました。渡部さんは同校野球部出身で、3年生時に春の県大会に初出場。同大会では小高工と対戦し、同点ホームランを放つなど投打に活躍されましたが残念ながら延長16回2-1で惜しくも敗退となりました。3年前に只見に戻られ、現在は町内の(株)美馬生コンに勤務されています。今でも野球部の練習や試合を観戦し、当時を重ねながら応援されています。そんな経緯から平成29年から3年連続で野球部に用具を寄贈するなどの応援活動を行っています。野球用具を手渡された主将の渡部倫さんは「甲子園を目指し頑張ります」とお礼を述べ、渡部さんは「OBとしてこれからも応援していきたい」と話し、長谷川清之監督は「学校や保護者の負担が大きい中、OBからのバックアップは非常に心強い」と感謝の言葉を述べました。



▲野球部に用具を寄贈する渡部さん(左)と受け取る渡部主将(右)と野球部員の皆さん